日本共産党
池田ファンクラブ・ニュース
あした天気にな～れ
169号
2015年11月
部内資料
発行責任者　太田　勍　(62-5727)
議員連絡先　うすい孝彦　(62-5093)
服部　久子　(62-4357)
編集責任者　山本　久子　(61-1066)

戦争法廃止を求める統一署名を実施
全国で2千万、池田町で2000目標

総がかり実行委員会が署名活動をよびかけ

戦争させない・9条壊すな！総がかり実行委員会は、戦争法（安全保障関連法）廃止を求める署名活動を呼びかけました。

「戦争法」は憲法違反であり、立憲主義、民主主義、平和主義の破壊です。安倍首相は口を開けば「自由と民主主義、法の支配を価値観とする」という言葉を常用しますが、これとは裏腹に、憲法を踏みにじったのです。これをこのままにしていれば、憲法に縛られず、憲法の上に立って権力を行使する専制政治、独裁政治になってしまいます。

戦前の暗黒政治、軍国主義に逆戻りさせてはなりません。私たちは主権者として声をあげ、行動し、意思を示す時だと思います。

来年4月までに2000署名を

池田町では6月に「戦争法に反対する町民の会」が結成され，署名活動や集会、のぼり旗を押し立てた軽トラック30余台の反対パレード、大看板8枚を町中に設置し町民にアピールする行動や、新聞折り込みや配布による8回の訴えなどの活動が行われました。9月19日の参議院での強行採決により成立させられましたが、このエネルギーを「戦争法」廃止へつなげて安倍内閣を追い詰めましょう。

署名活動の全国目標は2千万で、池田町では2000を目標として取り組みます。

「町民の会」と一緒にファンクラブでも取り組みますので、来訪の節はご協力をお願いいたします。

2015年夏　参議院選挙
予定候補者

唐沢ちあき
長野選挙区
千曲市出身　44歳
信州から憲法9条を守る。

たけだ良介（比例代表）
活動地域　静岡、愛知、岐阜、三重、長野、新潟、石川、富山、福井
中野市出身　36歳
戦争法廃止の国民連合政府を！

コラム 有明

今年のりんごはとても美味しい。農業は、私たちの食生活に直接関係するためとても関心がある。美味しいりんごを食べながらふと1句思いついた。

「TPP　輸出リンゴは　富裕層」

▼政府は「日本の農業を大規模化して上質な果物や野菜をどんどん輸出すればよい」と言うが、輸出先で食べる人たちは富裕層だろうと思うと複雑だ。▼食料自給率がすでに40％をきっている状況にも不安がある。胃袋を外国に頼っていてよいのだろうか。今に始まったことではないが、TPPが運用されれば、今より安価な輸入肉を使った味付けの濃い加工食品が出回ることになるのではないか。ハンバーグやレトルト食品、ハムソーセージなどだ。若者の動脈硬化が進むのではないかと気になる。▼食品添加物も不明な物が多くなる。ところで、逆に日本に食料を輸出するために食料事情が悪化する国も出てくるのではないか。特に子どもたちの貧困が深刻になる。▼医療についても保険適応外の薬が増えると言われている。いずれ治療内容にも貧富の差が出ることが考えられる。黙っていられないTPPだがあまりにも秘密内容が多く疑問だらけだ。誰のための何のためのTPPなのか関心を持ってみていきたい。

シリーズ 遺伝子組み換え食品とは？

帯刀益夫（東北大学名誉教授）

第6回　作物種は野生種の遺伝子の変異によって出来上がった

最近では、穀物種のゲノム研究が進み、この農業革命がどのような遺伝子の選別によっておきたのかを明らかにしはじめました。これまでの遺伝子の解析結果は、人びとが新しい穀物種を完成させるのに、さまざまの植物の発生過程での遺伝子を標的として「品種改良」を行ってきたことを明確にし、栽培化は「新石器時代の遺伝子操作」とも呼ばれます。

栽培化の過程で、どんな遺伝子に変異が起きて、野生種が現代の作物に変わったのか具体例を示しましょう。

トウモロコシの例

作物種としてのトウモロコシでは、一本の太い茎が中心となって短い枝がついていますが、先祖のテオシントはたくさんの長い枝が分かれて、茎についています。

これらの違いの原因になっているのはtb1という遺伝子の発現が高まるような突然変異が起きていたからだとわかりました。この遺伝子は細胞の増殖を抑える働きがあるので、腋窩の羽の分裂組織と枝分かれや伸張がより強く抑えるようになり、最終的なトウモロコシの形態になったと考えられます。古代の人々は、野生のテオシント植物を栽培しながら、頂芽優勢の違いを指標に選別してゆき、現在のトウモロコシを作りだしたのです。この栽培化での人為的な選択では、知らず知らずのうちに、tb1遺伝子の発現量が多い変種を選別してきたことになります。

また、tga1という転写因子をコードする遺伝子も、トウモロコシとテオシントの形の違いの原因遺伝子として発見されました。その表現型は多面的で、木質化、シリカの沈着、三次元的な器官の成長、器官のサイズなどに関係していました。この遺伝子のトウモロコシとテオシントの遺伝子の違いは、わずか一つのアミノ酸が違うという突然変異が起きただけで、この遺伝子によって制御を受けているたくさんの遺伝子の発現に大きな変化が起きたのです。

イネの例

野生のイネに特徴的な脱粒性（種が落ちてしまうこと）がなくなったことは、コメの収穫量を上昇させる重要な変化です。野生種は、種が実れば早く落ちて地上にばらまかれるのが繁殖のために有利ですが、人間が稲のタネであるコメを収穫するためには、実った後もそのまま穂に残っている方が楽に収穫できます。

そこで、この人間にとって有利な性質を選別して現在の作物種を作り出してきたのです。この脱粒性を規定している遺伝子は、日本の研究者によって、qSH1遺伝子であることがつきとめられました。

この遺伝子は、ショウジョウバエで最初に見つかったホメオボックスを持つ転写因子の遺伝子でした。植物の種子の形態形成も、動物の形態形成を制御する遺伝子の仲間が関わっていたのです。ジャポニカ米は短い粒で、幅が広いコメを作りますが、インディカイネ米は長い粒で、幅が細いコメを作ります。qSH1遺伝子を同定した日本の同じ研究グループが、これら2品種の違いの原因の遺伝子を探し、幅を細くしているqSW5遺伝子の単離に成功しました。この遺伝子が、イネの栽培化の過程で部分的な欠失を起こしたためにその機能を失い、コメの外側のもみのサイズが約2割増大し、コメの粒の幅が大きくなったと考えられます。

栽培化で選択された遺伝子の特徴

作物の栽培化の歴史を植物の遺伝的性質の上からまとめると、第一の特徴は、栽培化の間におきた植物の、形態学的あるいは構造的な変化の原因遺伝子では、6つの重要な遺伝子のうち、5つが転写因子の遺伝子であったことです。植物に限らず、動物でも形態形成や個体発生では、転写因子という、いくつかの遺伝子の調節に支配的に働いている遺伝子に起きた突然変異を選別してきたのです。

また、果実や種子などの大きさを増やすような突然変異も多いのですが、その原因遺伝子は、細胞の分裂の制御をおこなう遺伝子でした。器官を大きくするためには、そこの細胞をたくさん増やせばよいので、結果は当然のことのように見えます。